



県内でも生息数が増えているイノシシの「くくりわな」の設置方法を学ぶ研修の参加者(2018年6月15日、新潟市で)＝いずれも「ういるこ」提供

イノシシ 捕獲研修場



長岡の新興企業

住民に普及へ

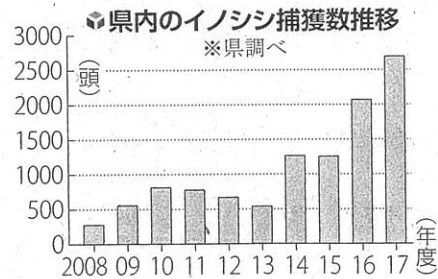
長岡市の長岡技術科学大学内にあるベンチャー企業「ういるこ」が2019年度から、農家や住民らにもわなを使ってイノシシなどの野生有害鳥獣を捕獲する方法を広く普及させるため、同市内に技術研修場を設ける。社長を務めている同大の山本希准教授(47)(生態学)は「人里への出没が増えているイノシシを減らす対策は急務」と呼びかけている。

箱わな ■ くくりわな

イノシシ対策で張り巡らされた電気柵(2018年8月、長岡市蓮花寺で)＝長岡市提供



「ういるこ」は、野生鳥獣被害対策の専門組織として18年5月に設立。人間と野生動物の共存を目指し、鳥獣の生態調査や被害対策に取り組んだり、自治体の担当者を対象に研修を企画



同市内の農地、納屋などを研修拠点として学んでもらう対策の主な対象はイノシシ。自治体職員らに加え、猟友会メンバー、農家や住民らに「箱わな」や「くくりわな」の仕掛けや、野生動物が通る場所の見極め方などについて学んでもらう。山本准教授は「春から夏にかけてはやぶが深く、銃による捕獲ができない。わなによる捕獲技術を広く習得してもらいたい」と話

している。県によると、16年度末時点、県内のイノシシ生息数は推計で3215頭、2万5171頭。生息範囲の拡大も確認され、捕獲数は急激に増えて17年度は2689頭に達し、農作物被害は17年度は約3900万円に上っている。県内自治体も電気柵を設置するなどの対策を進めているが、山本准教授によると、野生のイノシシはオスが繁殖期にメスを求めて動き回って生息範囲を広げる

という。家畜の豚が発熱や下痢で死ぬことがある豚コレラは、隣接する長野など5府県で感染が確認され、野生のイノシシを経由する感染拡大に警戒が必要で、農林水産省が捕獲や移動防止策を強化していく。山本准教授は「野生のイノシシからの感染は止めるのが難しいが、県内でも防疫対策を進めておく必要がある」と指摘する。ういるこのホームページアドレスは<https://www.wilco-company/>